

Our Mutual Friend の構想

西 條 隆 雄

1 はじめに

Our Mutual Friend (1864—65) の第1分冊は、テムズ河から引き上げられた死体が斧と鑿を使った、見るも無惨な斬殺体で、しかもこれが莫大な Harmon 遺産相続人のものであるという、実に扇情的な内容から始まる。読者はたちどころに1837年の Greenacre によるバラバラ殺人事件¹ を脳裏に思い浮かべて震えあがったであろうし、また近年、切り刻まれ毛布でくるんでウォータールー橋から吊るされていた、イタリ—警察謀報員の死体² をうす気味悪く思い出して戦慄を覚えたことであろう。第2分冊は、場面もすっかりかわって、塵芥の山とその処理人が登場する。塵芥の山といえば、当時のれっきとした存在物であり、しかもその醜い存在物が売却によって巨大な資本にかわりつつあった。

テムズ河の死体といい、塵芥の山といい、開巻からおぞましい場面を配したこの作品は、一見いかにも統一に欠け、親しみにくそうに思われる。しかし、やがてこの二つの存在物が作家のみるロンドンの基本イメージを形成し、ひいては人間および人間社会のそれにむかって収斂してゆく時、*Our Mutual Friend* はすばらしい社会分析を展開する作品に変容してゆく。

とりわけ塵芥の山とその相続をめぐる、作品の中心プロットの形成にあたっては、当時の様々な文芸の影響がその跡をとどめており、作家はこうした文芸が一般の人々に与えている意味をうまく汲みとりながら、塵芥処理人である Boffin 氏の人物像、および彼の作品中における役割を構築しているようである。本考では、Charles Dickens の作品構想の方法を追い、しばしば

歪められる Boffin 像を正確にとらえ、それによって作品の構成とテーマを考えてみたいと思う。

2 塵芥処理人と文学性

まず第一に、塵芥処理人である Boffin 氏が読者に受けいられる理由から考えてみたい。塵芥の山とその処理を実際に探訪³してみれば、*Our Mutual Friend* に描かれた世界からは想像もできぬほど異様で醜悪な事実がうかび上ってこよう。およそ文学とは縁遠い素材であることに加えて、Boffin 氏は文学をかじり、かつ作品の中で中心的な役割を演じるのである。このような奇抜な着想がすんなり読者に受けいられるであろうか。おそらく作家と読者がすなおに理解しあえる共通の基盤がどこかに存在していたと考えてしかるべきであろう。

The Companion to Our Mutual Friend (London: Allen & Unwin, 1986) にすでに掲載されているが、上記の疑問は “The Literary Dustman” という俗謡にであって、たちまち解消するのである。ちなみに作者名は Robert Glindon で、制作年は、その中に引用されている Grizi (Giulia Grisi, 1811—1869) がロンドンで初舞台をふんだ1834年である。この俗謡は当時ずいぶん流行ったらしい。最初の一節を引用してみよう。

THE LITERARY DUSTMAN⁴

Some Folks may talk of sense, egad!
 Vot holds a lofty station;
 But, tho' a dustman, I have had
 A liberal *hedication*.
 And tho' I never vent to school,
 Like many of my betters,
 A turnpike man, vot varnt no fool,
 He larnt me all my letters.

Chorus.

They calls me Adam Bell, 'tis clear,
 As Adam vos the fust man,
 And by a co-in-cide-ance queer,
 Vy! I'm the fust of Dustmen!

この俗謡と Boffin 氏との間にきわめて大きな類似性のあることは、一目瞭然であろう。俗謡にうたわれる Bell 氏の山は、ジョージ4世の像の立つ Battle Bridge (現在の King's Cross) 近辺、Gray's Inn Lane にあり、Boffin 氏の場合は少し北寄りであるがほぼ同じあたりの "Maiden Lane way—out Holloway direction"⁵ となっている。ここは当時の人々が即座に肯首する、名高い壘芥山脈の連なるところである。Bell 氏が安煉瓦の素材 "breeze" をふるいとりつつ "sifted out my larnin" すれば、Boffin 氏も同様な表現で次のように述べている。

"It's too late for me to begin shovelling and sifting at alphabeds and grammar-books." (50)

類似はさらにつづく。Bell 氏は文字を習得後、『ペニ・マガジン』(1832—45)、『ジョンソン英語辞典』、それにありとあらゆる定期行物を購読している。ペニ誌出現による、活字文化に対する喝望がせきを切って流れ出した1830年代のはじめには、印紙をはずしに出版しては投獄され、出獄してはふたたび不法出版をはじめめる出版社主もいるほどで、短命なる定期行物がわんざと市場に出まわった。活字文化の解放を求めるすさまじいエネルギーは、やがて印紙税(紙税などを含めこれを 'taxes on knowledge' と呼んだ)を4d から 1d に下げさせ(1836)、ついには撤廃に追いこむのである(1855)。また一方では、それは教育および自己の向上を求める声となり、ヴィクトリア朝の主要思潮のひとつを作りあげるエネルギーでもあった。

その自己の向上が、スノビズムと結びつくのは当然の理であろう。Bell 氏

は Scott, Byron, “Shikspar” を読み、芝居といえば、曲芸、メロドラマ、行進、歌劇といった、ごったな見せ物を演じる低級劇場へは行かず、勅許劇場であるドルアリー・レインに通うのである。息子には槍騎兵隊の将校の地位を買ってやり、娘はオペラ歌手に育て、自らはボクサーであった John Gully (1783—1863) の例にならい、国会議員に転身することを夢みる。

この俗謡にみられる活字、教育、そして自己向上の願望は、*Our Mutual Friend* の大きなモチーフとなって様々なプロットを展開する。Boffin 氏は言うにおよばず、Gaffer の娘は次のように述べて、弟の Charley に教育による立身を勧めめる。

“If I could make him [my father] believe that learning is a good thing, and that we might lead better lives, I should be a'most content to die.” (27—8)

そして作品はのちに、共に立身した人間である彼と師である Headstone の、みごとな内面世界の分析を展開してゆくのである。

ところで Boffin 氏は、バラッド売りの Silas Wegg を家庭教師として雇い、手はじめにギボン『ローマ衰亡史』(8巻本、赤表紙金縁の豪華本) を読んでもらっている。彼は “Print is now opening ahead of me!” (53) と述べ、“A literary man... will begin to lead me a new life” (53) と、活字による新生に狂喜している。彼の書棚には数々の豪華本が並んでいる。これらは作品のテーマと直接関係はないが、それがすべてディケンズの書齋に並んでいたというから面白い。Gibbon, *Decline and Fall of the Roman Empire*, 8巻本 (1825), Rollin, *Ancient History*, 6巻本 (1828), Plutarch, *Lives*, 6巻本 (1819), *Annual Register* 全巻 (1758—1860) である⁶。

ハーモン遺産を受け継ぎ大富豪となった “the Golden Dustman” (209, 307) は、もはや肉体労働にあけくれる dustman ではなく ‘literary dustman’ であって、“bright, eager, childishly-inquiring grey [eyes]” (46) をもち自助の精神を培う、ヴィクトリア朝の一つの典型像となる。成金むき出しの

Bell 氏とは異なり、Boffin 氏は名も Nicodemus (48) と命名されている。これは、イエス・キリストに新生についての教えを乞うた、ユダヤの民の指導者の名である。また彼は、馬ですらおびえる先代の居宅 “Harmony Jail” を相続したのちは “Boffin’s Bower” (53) というさわやかな呼称に改めている。したがって、純朴で誠実な Boffin 氏は、「黄金の心」をもった名実共に新生を歩む “the Golden Dustman” である。一見不可解な dustman なる素材は、このようにして一俗謡の流布によって、強力な下地ができていたのである。

3 守銭奴と秘書

しかし誠実な Boffin 氏は、物語のある時点から醜い守銭奴と化してゆく。Higden 婆さんを暖かく勇気づけ、心やさしいいたわりをつくして彼女の長途の旅立ちを見送る (391) まではよいが、次にわれわれがみる Boffin 氏は、金銭への執着をむき出しにし、人間関係を語る語彙はすべて金銭取引の語彙に還元し、富める者が貧しいものに苛酷にあたるのは当然だと述べ、せっせと守銭奴伝を買いあさっている。この変貌はいったい何を意味するのであるうか。

彼が買いあさる守銭奴伝のうち、作品中に名前が出ているものは、Kirby, Caulfield, Wilson, Merryweather の書物と *Annual Register* である(479—81)⁷。しかし Boffin 氏が手元において頻繁にながめた書物はどうやら Merryweather のものであったらしく、*Our Mutual Friend* には、Merryweather の守銭奴が記載順に詳しく引用されている。

だが、日々目を皿のようにして捜しもとめた Boffin 氏の蔵書の中には、これらをはるかに上回って守銭奴伝がならんでいたとは考えられないであろうか。当時守銭奴・吝嗇漢の伝記といえば、Edward Topham の *The Life of the Late Jone Elwes, Esquire* (1790) がまず第一にあげられよう⁸。そしてこの書物を参照して書きあげたといわれる W. Harrison Ainsworth,

The Miser's Daughter (1842) もまた、よく読まれた書物であった⁹。とりわけこれが戯曲化されると、その物語は急速に人々の間に広がった。とこころでこの作品を目にする時、*Our Mutual Friend* の構成が意外に明確になるのである。

そこには、守銭奴の娘と文無し男性が、幼少時の条件づきの約束にしたがって結婚する、そしてその間に遺言書の記載内容の変更あるいは財産をねらう卑劣漢の奸計がからむというプロットが配されている。ディケンズの名声の背後にかくれているとはいえ、エインズワースは当時の大人気作家で、守銭奴 Scrooge の出現する前年に発表されたこの作品にディケンズが無関心であったとは思えない。ディケンズならずとも、Boffin 氏ならば間違いなくこの作品を買い求めていたと考えておかしくはあるまい。

ところで *Our Mutual Friend* において、守銭奴の娘 (Bella は Boffin 氏の養女) と結婚する相手である Rokesmith は、Boffin 氏には不可解な “secretary” (97) として雇用を申し出、Boffin 邸で起居を共にするのである。身分ある男性が、両親を失ったりあるいは何らかの不幸ゆえに、守銭奴の家に秘書またはそれに類した身分でつかえ、しかるのちその家の令嬢とめでたく結ばれる、というプロットはどこかに存在しないであろうか。

その類型は、当時の芝居に見出される。Molière の『守銭奴』(*L'Avare*, 1688) がそのひな型であることは容易に想像できよう。同じく James Sheridan Knowles の *Secretary* (1843) もまた、その例である。ここには叔父の遺産継承、秘書 (正当な継承者) の雇用、かなわぬ恋とその成就が語られている。しかし同じ Knowles の手になる *Hunchback* (1832) は、筋、展開、結末において Rokesmith と Bella の関係に酷似している。まず、そのあらましをたどってみよう¹⁰。

Rochdale 伯が異国で死亡し、その子供も亡くなった知らせをうけて、執事であるせむし男 Walter は継承権第一位の血縁者のところへ赴く。ところがせむしであることを侮られた彼は、やむなく継承者と剣を交えることとな

った。この時仲裁に入った Thomas Clifford は、実に清潔な人柄であるうえに、生活もつつましく、Walter は彼の人柄につよく心をうたれ、嫁の世話を申し出る。ついでながら、Clifford には男爵領相続がみこまれている。かくして伯爵の娘 Julia と Clifford の話がまとまり、田園で育ち田園を愛する Julia は、世間を広く学ぶため、しばらく従妹とロンドンで生活を送ることとなった。

ところが、二人の女性はたちまち都会生活に溺れ、奢侈と放埒の限りをつくしはじめるのである。ある日物かげで二人の贅沢三昧の会話をぬすみ聞いた Clifford は、Julia の面前に姿をあらわし、悲しみの心情を吐露して立去る。いつしか傲慢になっていた彼女は、これを聞いて突然息苦しくなり呆然と立ちつくすが、やがて傷つけられたプライドゆえに、“I would not wed him now, were he more lowly at my feet to sue than ever he did!” (H260) と述べ、衝動的に別の人と結婚してもよいと Walter に告げる。かくして別の縁談がもち上る。

一方、Clifford は男爵領相続がご破算となり、今では Rochdale 新伯の秘書となっている。その彼が Julia の前にひざまづき、主である新伯の結婚催促の手紙を手渡す。時を経たいま、彼女は自分のとった行為を悔い、できることなら自分からすすんで Clifford の前にひざまづいて許しを乞いたいと思って、心は動転している。一旦退室したのち返答をうかがうためにふたたび入室してみると、彼女は机に顔を伏せ手を力なく垂らしている。彼は、その彼女の手をひざまづいて取る。Walter より「王女物語」を聞き、いまや愛こそがこの世で最も大切であることを悟る彼女は、ここで新 Rochdale 伯との結婚を解消し、Clifford と結ばれることを固く誓う。そして総決算の場で彼女は新伯の愛なき金銭結婚を見限り、無一文である“secretary”を選ぶのである。

この時 Walter は、自分が本当は故伯爵の長子であったにもかかわらず、せむし故に継承権をはずされていたことを告げ、いまや自分こそは正当な伯

爵領の継承者であることを証し、加えて Julia の実父であることを名乗り出る。そして “thy heart is proved” (H 289) と述べて二人の手を合わせる。彼は、Julia が奢侈に驕るときですら、“She’ll become her former self again.” (H 249) と固く信じて疑わなかったのである。

さて *Our Mutual Friend* においては、『守銭奴の娘』にみるごとく、Rokesmith と Bella は幼い時より将来結婚すべきことが約束されていて、そのことが遺産相続の条件となっている。彼はハーモン遺産を継いだ Boffin 氏の “secretary” となり、一方彼女は美しく成長し、Boffin 邸に養女として引きとられている。Rokesmith は身分、財産を何一つもたぬ一介の男性として Bella に求愛をするが、もともと貧しい家に生まれ、何とかお金特になりたいと夢みる彼女は、いまや Boffin 夫妻の後だてによりいかなる榮華も実現可能な立場にたつと、心のどこかにためらいを感じながらも、秘書風情 [“a mere secretary” (308)] の求愛を一蹴してしまう。ここで本名を名乗り出て Bella を手にし、遺言条件を満たすことは簡単であるが、それでは Bella をお金で買いとるにも等しく、加えて恩人 Boffin 夫妻から、現在の豊かな境遇を奪ってしまうことにもなる。彼女から二度とこの件はもちださぬことを約束させられ、Rokesmith は途方にくれる。

この沈んだ秘書の顔に John Harmon の面影を見て驚いたのは Boffin 夫人であった。Knowles の『秘書』が形をかえて再現される。死んだはずの John は生きていたのだ。そしてこの日から Boffin 氏は性格を一変する。彼は古来幾多の守銭奴の生き方を執拗にまね、またその伝記を読ませては、話が守銭奴の財宝のかくし場所である急須、引出し、壁の裂け目のところにくると、目を輝かせ、息をはずませ、手足をふるわせる。言葉に、声に、態度に、生々しいまでの守銭奴の本性を具現する彼は、かつての誠実で温厚な人物からは、想像もおよばぬ変身を示す。一方 Rokesmith に対しては、文無しの分際で金が更に大きな金を生むこの娘にあつかましくも言い寄ったものだ、即刻解雇をいい渡す。

この Boffin 氏の姿をみた Bella は、すでに四六時中目にする金銭への妄執のみにくさに、また Rokesmith に対する愛とすまなさゆえに、これ以上守銭奴の家にとどまる気持は消え、Boffin 氏をさんざんののしったあげく、ここを飛び出す。彼女は、“I would ask him [Rokesmith] to forgive me now again upon my knees, if it would spare him.” (591) と述べる。ひざまずいてかつての傲慢の許しを乞おうとするのは、『せむし男』の Julia の場合と同じである。そして彼女は豪華な衣裳をかなぐりすて、ここへやってきた時のそまつな衣服に身をつつんで、両親のもとに帰るのである。迷いからさめた Bella は、躊躇することなく、お払い箱となった Rokesmith の結婚申し込みをうけいれる。

誇りと真情の間をゆれる Julia と “always at war with myself” (471) という Bella の類似性、文無しとなった Clifford をあくまで支持し、そうする一方で娘に「王女物語」を語って愛の大切さを教え、娘に選択をあやまらせなかった「せむし男」と、守銭奴を演じて Bella に愛の尊さを教え、Rokesmith との結婚を成就させた「塵芥処理人」の類似性は偶然とはいいい切れまい。

4 Boffin 像

以上にみるように、作品中における Boffin 氏のはたらきは、どうやら当時のいろんな文芸の中にその典拠を求めることができそうである。したがって、莫大な遺産相続により篤実な人間が金の亡者に変じてゆくという傾向は、確かにひろく人間にみられる傾向にはちがいないが、Boffin 氏にこれをあてはめることは無理なようである。A. O. J. Cockshut とか Graham Smith のように、Boffin 氏の変身が演技であったというのはつけ足して、ディケンズは金銭による陥落に本気でと組んでいたと考える批評家は多く、また Geoffrey Thurley のように、Boffin 氏が墮落しないのは読者を啓蒙するために作家が介入していると考えられる批評家もいる¹¹。しかし、こうした都合主

義の解釈は、塵芥処理人を一夜にして巨富を手にした人間であるとか、卑賤業に従事する人間の本性のあらわれというレベルで読みとろうとすることから帰結する誤謬であろう。

“The Literary Dustman”より生まれ出た Boffin 氏は、自己の向上および養女 Bella に対する思いやりと愛情以外に心にかけることはなく、教養とか慈善には気前よくお金を使いこそすれ、心底は謙虚で朴訥ですらある。守銭奴のかけらは微塵もない。しかし Rokesmith が遺産を相続すべき当の John Harmon であることを知り、しかも Bella が境遇の変化によっていまや貧しい書記風情を見下し、人間の誠意とか真情をふみにじる態度をみて、彼は Rokesmith と打ちあわせ、一大演技を決意するのである。守銭奴の富に安住する生活の醜さを教え、人間にとって何が一番大切であるかに気づかせ、本来のおのれを失った彼女を曇らぬ本性に立ち返らせるのがその目的であった。彼女の本心が健全であることを確信していればこそ、Bella を “furnace of proof” (461) に投げ入れ、彼女が “pure gold” であるかそれとも単なる “dross” にすぎないのかを試したのである。

この点で Boffin 氏のはたらきは、“thy heart is proved” と述べる「せむし男」Walter のそれと軌を一にしているといえよう。Boffin 氏の演技は、芝居であったとはいえ、迫真性においては多くの読者・批評家をも欺くほどに鬼々せまるものであるが、いずれにせよ “furnace of proof” が Boffin 氏の根本意図であったことは間違いない。そして、この「試し」が作品全体を統轄する中心テーマに結びついていることにも、私達は気づくのである。

5 作品のテーマと構成

Boffin—Rokesmith—Bella のプロットにおいて “furnace of proof” が中心テーマとなっていれば、multiple-plot 小説である *Our Mutual Friend* は、人間精神の同様な解剖をそれぞれのプロットの中で並行して行っていることが、その特徴といえるであろう。そうした解剖が一堂に結集する時、作

品はヴィクトリア朝社会の分析のみならず、時代を問わずいつの世にも通じる、人間社会の巨大でみごとな解剖の書と化すのである。

まず、“Our Mutual Friend” (111) とよばれる主人公 Rokesmsith の行動に目をむけてみよう。殺害されたはずの John Harmon は偽名を使って Bella に近づき、Boffin 氏の秘書となった。文字どおり “living-dead man” (373) である Rokesmith は、Bella に求愛して拒まれると、自分は正当な相続者であると名乗りでるべきか、それとも沈黙を続けるべきか、逡巡に逡巡を重ねる。しかしついには一方的な、自己中心的な考えでおし切るよりも、Bella の自発的な愛情を勝ち取ることが何より大切であると考え、おのれの利己的な考えをアルプスの高さにも匹敵するほどの塵芥の山の下に埋めようとするのであった (378)。

この、“living-dead man” が我執、妄執をけっしてよみがえることのないよう塵芥の山また山の下に埋め、謙虚な人間に生まれかわるとというのが、作品を支配するテーマであろう。いわゆる「よみがえり」である。アルプスの高さにまでとあるのは、人間の我執、妄執がいかにかんたし難いものであるかを示している。ここに集約されているように、作品は人間の心の奥底に目をむけ、‘living-dead’ の状態にある人間および社会を一大分析したものである。

作品は冒頭より死体引きあげの場面ではじまる。テムズ河を生象徴と考えば、死体は人間の心の奥底における「精神的死」をあらわしていると考えられる。河底の死体、つまり意識の底にあるものは、往々にしておぞましく、破壊的で、凶暴なことは、よく知るところである。この奥底観察の一例は Bradley Headstone にみられる。彼は “pauper lad” (218) から身をおこし、“mechanical” (217) に知識をつめこんで “decent” な身分に昇るが、「立派な衣服と体の間どこか一致のみられぬ」彼は、言動においてたえず “uneasy” (217), “not at his ease” (225) である。体面をつくろうために様々な衝動をおし殺さざるをえず、それゆえ “there was

enough of what was animal, and of what was fiery (though smouldering)” (218) と表現されている。その彼は、ひたむきな努力の果てに今では教師という尊敬ある職業についている。しかし、そうした表皮をかぶる人間も、やがて一人の女性をめぐる愛と嫉妬ゆえに “an ill-tamed wild animal” (546) になりかわり、殺人を犯し身の破滅を招くに至るのである。

立身出世した人間の内的不安定とは対照的に、自嘲的な生活の中から精神的覚醒をみせるのが、“buried alive” (11) と紹介される紳士階級 Eugene Wrayburn である。彼は幼少時から万事を父親に規定され、職業はおろか結婚すべき女性にいたるまで決定済の中で育っている。自然的感情の発露を経験せずに成人し、法廷弁護士となった今では、わずらわしい社交連中の間で「生き埋め」にされている。Boffin 氏の勤勉を愚弄し、Headstone の立身出世をあざ笑い、いまだ “something really worth being energetic about” (20) を見出せずいたずらに無目的な生活を送っている。何事にも “careless” (165, 229, 240) で、いつしか “carelessness” (406, 533, 692) が第二の天性となってしまった彼が “I have until now suppressed my domestic destiny.” (146) と述べる時、われわれは彼の心の奥底にうごめく、生への意志をうかがい知るのである。

ある社交の集りで、John Harmon の姉は好きな人と結婚したが貧乏くらしの末なくなり、主人もあとを追うようになくなったという話を聞いた時、Eugene は話の腰を折ろうとする Tippins 夫人に対して、殺しかねないほどの激しい怒りを覚えているし (14)、また Charley が姉の教養をあからさまに卑下した時など、少年のあごをつかみ顔を捻りあげている (19)。因襲世界に「生き埋め」にされているとはいえ、心底に純粋な人間感情が芽ぶいている証しである。Lizzie をはじめて見た時から心を引きかれ、彼女に接近してゆく自分の行為を “burglary” (165), “every crime in the Newgate Calendar” (177) と表現している。言葉の過激さはそのまま内的衝動の激しさをあらわしていよう。しかし、Bradley を追跡した追跡される場面 (541—

5) からうかがえるように、彼の思考は出口なき迷路をさまよっており、Jenny Wren がいみじくも看破するように、Lizzie を本当に必要とするかどうかを心の底でためらいつづけている。だがついに、死傷をうけ溺死同然のところを Lizzie に救い出され、遠い意識の底からようやく確信する愛がうかび上ってくるのである (741)。

莫大な富、金銭欲、あるいは立身欲がどのような人間精神を作りあげてゆくか、Veneering のうすっぺらな生き方、“Podsnappery” (129, 566) なるうぬぼれた島国精神、互いをだまし合うことしか存在しない Lammler 夫妻の結婚生活、そして高利貸し Fledgeby と Riah のみじめな主従関係など、*Our Mutual Friend* は様々な例をあげながら広く社会の living-deadness をくり広げる。そして、その主題を象徴するかのように、作品世界には汚い塵芥の山と汚いテムズ河が存在する。

塵芥の山は、当時単なるゴミに加え、人糞すら混じていたというから、その汚なさは容易に想像できるであろう。また、あらゆる汚水、下水の流れこむテムズ河の悪臭と汚なさは当時の話題で、『パンチ』誌には数々の戯画と痛烈な風刺文がみえる。Michael Faraday による水質検査のおぞましい結果 (29巻, 1855年7月21日)、Father Thames の Diphtheria, Serofula, Cholera なる三人の子供 (35巻, 1857年7月3日)、また、数々の動物の死骸の浮かぶ黒一色の河に骸骨の溜ぐ舟を配した ‘The “Silent-Highway” Man—Your Money or Your Life’ の戯画 (35巻, 1858年7月10日) などである。テムズ河は ‘silent-highway’, つまり死の河となっている。その戯画には、国会議員による ‘nosing expedition’ は独身者または遺書をしたためた者に限るとか、医師および氣つけ用ブランデーその他を十分に用意すること。の一文が付けられている。

この二つの汚い存在物を作品中に配しているのは、地上に住む人間を living-dead men ととらえ、人間の醜い生の営み、本来的な自己を失い「死」の状態に墮している姿をそのままこれらのきたない存在物に表象させようと

しているのであろう。しかし、この汚い存在物はいったいどんな意味を含んでいるのか。ここがしばしば見落されているのである。

先代の Harmon は死に臨んで次のように指示した。

He directs himself to be buried with certain eccentric ceremonies and precautions against his coming to life, with which I need not bore you, ... (Lightwood, 15)

“a awful Tartar” (Boffin, 89) であり “the hard wrathful and sordid nature” (101) として恐れられた守銭奴が、死後「よみがえる」ことのないようにと仰々しい指示を下している。これは、塵芥の山に埋葬すれば死体がよみがえるという伝承をふまえねば理解し難いであろう。その伝承は、*Household Words* にみえる。それによれば、運河に投身自殺した男の溺死体を、犬猫の例にならって灰の中に首まで埋めておくと、太陽熱の作用で死んだ男が息を吹きかえすというのである¹²。しかも、この男が自殺においやられた原因となる遺産相続権利証が、この塵芥の山の中からみつかったという物語で、*Our Mutual Friend* とどこか似かよっている。ともかく、塵芥の山は「よみがえり」の働きをもそなえているのである。

そして同時に、先代 Harmon の娘に対する仕打ちが “such a marriage would make Dust of her heart and Dust of her life” (Lightwood, 14) と表現されるように、否定、破壊、死をも意味する。それは、単に個人的営みに限らず、政治をも含めた、広く金銭崇拜社会の営みをあらわす比喩表現ともなっている。

My lords and gentlemen and honourable boards, when you in the course of your dust-shovelling and cinder-raking have piled up a mountain of pretentious failure, you must off with your honourable coats for the removal of it, and fall to the work with the power of all the queen's horses and all the queen's men, or it will come

rushing down and bury us alive. (503)

ここでは、政治の歪みが人民を「生き埋め」にするとの痛烈な風刺に使われている。ともかく塵芥の山は、富、破壊、そしてよみがえりを意味する、作品の一大メタファーとなっている。

一方、河と海についても同様なことが指摘できるであろう。「ハーモン殺害のうわさは海に注ぎ、流れ去ってゆく」(31)とあり、Lizzieにとって河は「死にむかって流れゆく暗黒の大河」(71)である。ところが Higden 婆さんが逃げのびてゆくテムズ河上流は、無邪気な子供のイメージで描かれている。

In those pleasant towns on Thames, you may hear the fall of the water over the weirs... and from the bridge you may see the young river, dimpled like a young child, playfully gliding away among the trees, unpolluted by the defilements that lie in wait for it on its course, and as yet out of hearing of the deep summons of the sea. (504)

テムズ河は、えくぼを作り、木々の間を戯れかけぬけて、来るべき汚濁も、あるいは海(=死)の召還も知らぬ、実に若々しく健康な河である。

察するに、テムズ河もまた生そのものの象徴であって、清純な幼な児にはじまり、流れ下るにしたがって様々な汚れ、奸計、欲望のとりことなり、やがて死を迎える¹³。清濁あわせもつこの生の河の、下流の汚さは言語に尽くしがたく、河底には死体をすら蔵している。それはそのまま、人の心の決して表面にはあらわれないことのない邪悪さ、不条理を代弁するものでもあろう。

興味深いことに、ディケンズはこの意識の奥底をみごとに浮かび上らせて見せてくれる。それは、溺死体同然となった Riderhood よみがえりの場面である(第3巻、第3章)。ヴィクトリア朝の人々は、宗教的奇跡としてで

はなく、医学的奇跡としての「よみがえり」に大きな興味を示した¹⁴。溺死者「よみがえり」の科学実験ともいべきこの場面は、興味しんしんと見入っている当時の人々の活写であると同時に、作家による「正直者」の心底解剖でもある。その奥底が意識の回復と共に次第にうかび上り、ついに表面に姿をみせた時、それは何であったか。「正直」どころか、邪悪以外の何ものでもなく、感謝の気持や人間味をひとかけらも持ちあわせぬ、別人種の心であることが判明したのである。

汚い塵芥の山とテムズ河は、事実でありまた象徴である。これを荒地と水におきかえ、水に救いと再生を読みとろうとするのは、わかりやすいにはちがいないが作品のコンテクストからは少々はずれているといわねばならない¹⁵。ディケンズは、メタファーや象徴を厳密に使ってはおらず、事物にいるんな可能性をもたせていて、事実、彼の文学士魂は単純にわりきるにはあまりにも豊穣すぎるのである。

更に、作品は執筆前からすでに一つの枠組みの中で構想されている。それは全4巻の巻題に明らかである¹⁶。第1巻は‘The Cup and The Lip’と題され、ついで酒杯が必ずしも唇にあてがわれることにはならぬ、Ancaeus の故事がふまえられている。様々な偽りの姿に埋没した人々のなりわいがここには展示されている。‘Birds of A Feather’ (第2巻)において、これが更に拡大され、各々の登場人物が劇的な展開をみせる第3巻(‘A Long Journey’)を経て、第4巻は‘A Turning’つまりおさまるべきところに帰結するという構図である。Andrew Sanders は、これを次のように説明する。

The long lane of Book the Third... ‘turns in’ bringing justice to the unjust, death to the deathly, and new life to those who have learnt how to live¹⁷.

言いかえれば、道徳的な枠組みは最初から明確に設定されているのである。作中人物は、おのれとの闘いを生き抜いて本来的な自己に目覚めるか、それ

とも Jenny Wren が Fledgeby に “Get down to life !” (281) と述べたように、実際には “life down in the dark” または “grave” を意味する世界で目覚めぬまま生きつづけるか、すべて “furnace of proof” を経て、おのれの何たるかを証明してゆくのである。

Our Mutual Friend は、金銭崇拜社会において人々の営みが麻痺し、硬化し、歪曲している姿を描き、そうした中で人間の愛・信頼・救いをどこにつなぎとめるべきかを追求した作品である。それはヴィクトリア朝社会についてののみならず、汚いテムズ河と塵芥の山を作品の二大表象とすることによって、広く人間および人間社会の “living-deadness” を分析する、巨大なスケールの作品となっている。スケールが大きいだけに、プロットやシチュエーションの選択には、読者とのしっかりした共通理解を必要としたにちがいない。とまれ、Boffin 像、“living-dead man” のセンセイショナリズムをはじめ、豊かな事例は巧みに制御され、すばらしい社会図を呈するに至っている。そして、“living-dead” の世界の中で、少数であるとはいえ、本源的なおのれを見出し、試練をへてよみがえった人々の健全さをも垣間みせてくれるのである。

注

- 1 “Chronicle” section in *Annual Register*, 1837 : Jan. 9, Feb. 2, Apr. 6, May 2.
- 2 Charles Dickens, “Night Walk” in *The Uncommercial Traveller*; Willoughby Matchett, “The Chopped-up Murdered Man,” *Dickensian*, 14 (1918) : 117—9.
- 3 当時の塵芥の山については次の文献に詳しい。Henry Mayhew, *London Labour and the London Poor*, II (1851; rpt. London : Frank Cass & Co., 1967), pp. 166—79; James Greenwood, “Mr. Dodd’s Dust Yard,” *Unsentimental Journeys : or, Byways of Modern Babylon* (London : Ward, Lock & Tyler, 1867), pp. 64—71; Humphry House, *The Dickens World* (London : Oxford University Press, 1941), pp. 166—7; 松村昌家『ディケンズとロンドン』研究社, 1981. 171—97頁。
- 4 John Ashton, *Modern Street Ballads* (London : Chatto & Windus, 1888),

pp.160—3. See also Louis James, *English Popular Literature 1819—1851* (New York : Columbia University press, 1976), pp.149—50, 349—50. 俗話の作者名は John O' London ed., *London Stories* (1882; rpt. New York : Crescent Books, 1985), p.290 に出ている。

5 Charles Dickens, *Our Mutual Friend* (1952; rpt. London : Oxford University Press, 1963), p.51. 以下、引用は () 内にページ数で示す。

6 J.H. Stonehouse ed., *Catalogue of the Library of Charles Dickens from Gadshill* (London : Picadilly Fountain Press, 1935)

7 書名は以下の通りである。

R. S. Kirby *The Wonderful and Eccentric Museum, or Magazine of Remarkable Characters*, 6 vols., (1803—20); James Caulfield, *Portraits, Memoirs, and Characters of Remarkable Persons*, 4 vols., (1813—19); Henry Wilson, *Wonderful Characters*, 3 vols., (1821); F. Somner Merryweather, *Lives and Anecdotes of Misers* (1850)

とり扱う守銭奴は Kirby : Thomas Cooke, John Overs, John Reid; *Caulfield* : Thomas Guy; *Wilson* : Thomas Cooke, Daniel Dancer, John Elwes, John Overs, Thomas Pett, James Taylor; *Annual Register* : Jardin brothers [vol. 10 (1768)], Elizabeth Wilcocks [vol. 11 (1768)] である。なお次の論文もあわせて参照されたい。

Stanley Freeman, "The Motif of Reading in *Our Mutual Friend*," *Nineteenth-Century Fiction*, 28 (1973); Wilfred P. Dvorak, "Charles Dickens' *Our Mutual Friend* and Frederick Somner Merryweather's *Lives and Anecdotes of Misers*," *Dickens Studies Annual*, 9 (New York : AMS Press, 1981).

8 1805年までに英国で12版、外国で8版を重ねた。["Appendix to the Twelfth Edition" in *The Life of the Late John Elwes, Esquire* (London : James Ridgway, 1805), p.99].

9 Coleman O. Parsons, "Harrison Ainsworth's Use of John Elwes in 'The Miser's Daughter'," *Notes and Queries* (Aug. 24, 1946) : 68—71.

10 "The Secretary", "The Hunchback" in *The Dramatic Works of James Sheridan Knowles* (London : G. Routledge & Co., 1858). J.H. Stonehouse は Dickens 所蔵の *The Hunchback; a Play in five Acts* に次のような記載をのせている。"With autograph, 'Charles Dickens, July, 1832.' A well-read copy, with a few MS. notes, apparently by Dickens." なお次の論文を参照。

Michael Cotsell, "Secretary or Sad Clerk? The Problem with John Harmon," *Dickens Quarterly*, 1 (1984) : 130—6.

- 11 A. O. J. Cockshut, *The Imagination of Charles Dickens* (London : Collins, 1961), p. 181; "One of the biggest disappointments in literature occurs in *Our Mutual Friend* at the moment when we discover that Boffin's moral degeneration has been nothing but a well-intentioned sham" [Graham Smith, *Dickens, Money and Society* (University of California Press, 1968), p. 182]. Geoffrey Thurley, *The Dickens Myth : Its Genesis and Structure* (London : Routledge & Kegan Paul, 1976), p. 307.
- 12 "It is a fact well known to those who work in the vicinity of these great Dust-heaps, that when the ashes have been warmed by the sun, cats and kittens that have been taken out of the canal and buried a few inches beneath the surface, have usually revived; and the same has often occurred in the case of men." Richard H. Horne, "Dust; or Ugliness Redeemed," *Household Words*, 1 (July 13, 1850), p. 383.
- 13 Avrom Fleishman, "The City and The River : Dicken's Symbolic Landscape," *Studies in the Later Dickens*, ed. Jean-Claude Amalric (Montpellier : Université Paul Valéry, 1973), p. 124.
- 14 Albert D. Hutter, "Dismemberment and Articulation in *Our Mutual Friend*," *Dickens Studies Annual*, 11 (1983), p. 149.
- 15 「川と再生」という概念は J. H. Miller 以来多くの批評家の継承するところであるが, "Bella, though without the literal immersion in the water of death" [J. Hillis Miller, *Charles Dickens : The World of His Novels* (Cambridge : Harvard University Press, 1959), p. 326] のように, 多少のこじつけを免れない。
- 16 Ernest Boll, "The Plotting of *Our Mutual Friend*," *Modern Philology*, 42 (1944), p. 102.
- 17 Andrew Sanders, *Charles Dickens : Resurrectionist* (London : Mcmillan, 1982), p. 195.

Synopsis

The Making of *Our Mutual Friend* from
Contemporary Literary Sources

Takao Saijo

I begin by posing a question : whether a dustman at the bottom layer of society, can place himself in a literary piece and play the role of a central figure in it. It is a rather unlikely idea, difficult to be accepted by the reader. There must have existed an implicit understanding between the author and the reader when Dickens had recourse to taking up a dustman in *Our Mutual Friend*. What brought about their mutual understanding was, I presume, a ballad entitled "The Literary Dustman" published in 1834. There lie many similarities between Mr. Boffin and Mr. Bell, in their living quarters, their sifting out their "larnin," and their interest in the world of print. The themes of print and education will naturally evolve from this ballad, together with that of snobbism and social climbing, as their counterparts.

But the literary dustman becomes a miser, and here the reader encounters the familiar theme of a miser's (adopted) daughter loved by a penniless young man, who in the end proves to be the legitimate heir to the inheritance. Ainsworth's *The Miser's Daughter* (1842) might have slipped into Dickens's mind : at least it must have stood on Mr. Boffin's bookshelves. But the penniless young man in *Our Mutual Friend* offers himself as secretary, to Mr. Boffin's total incomprehension. In Molière's *L'Avare* (1668), a steward proposes marriage to a miser's

daughter, and in James Sheridan Knowles's *The Secretary* (1843) and *The Hunchback* (1832), it is a secretary who plays the central role.

Especially *The Hunchback* has much in common with *Our Mutual Friend*: both heroines oscillate between wounded pride and the true self; in the former a 'hunchback' tells a princess's story to bring his daughter back to her former self, while in the latter, a 'dustman' plays a miser to bring his adopted daughter back to her true self; in both, the heroine regrets her ungracious behaviour to the secretary and wishes to kneel before him. It is clear, accordingly, where the Rokesmith-Bella story of *Our Mutual Friend* comes from. Dickens has relied on a familiar plot of contemporary sources as the basic framework for the novel.

At what did Dickens aim, then, in the novel where the central plot is familiar to the reader? His greatness lies in developing a great theme from a very sensational beginning. Rokesmith turns out to be "a living-dead man." The idea of "living-deadness" is applied to almost all the characters in the novel. *Our Mutual Friend* is Dickens's deep analysis of living-deadness of man and society in the contemporary world. And fittingly, there are two symbols in the novel: the dust mounds and the river, both of which are very dirty, but which also have potentialities of restoring people to life (see Horne's "Dust" in *Household Words*, where it is mentioned that a drowned man could be restored to life when buried up to neck under a dust mound). The Thames is not used in a simple way of immersion-to-resurrection. It is compared to man's inside with its innocence and its dead-body quality at the bottom. Thus, Headstone's fiery depths are dramatically

probed; Riderhood's unconscious depth is brought to light in the resurrection scene, proving to be nothing other than wickedness; and out of the depth of Eugene, who has been "buried alive," a gleam of sure love finally comes up to the surface.

The novel is composed within a moral framework which the four book-titles illustrate, the emphasis being placed on whether all characters, after going through "the furnace of proof," come out "pure gold." Many strands of the novel—Rokesmith-Bella story, analysis of the *ennui* world, psychological probing into the heart of a respected gentleman, and Eugene's heroic break from a conventional marriage—all these, which might have developed as independent fiction, are integrated under the theme of living-deadness, and, with the aid of the dust mounds and the river as symbolic devices, into the vivid illustration of life and death of the Victorian, if not our own, world.